
立つ鳥跡を濁さず

中尾 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立つ鳥跡を濁さず

【ZPDF】

N1383A

【作者名】

中尾 凜

【あらすじ】

私たちにも確かに、あの時代があった。思い出せば一つでもあの時間に帰れる。

LESSON . 1

19**年。私は、いつもより、早く起きた。
もう、三月だといつて、外の空気はひんやり冷たい。暦の上では、
もう春だといつて。

うーん、早いな・・・三年間は。

3月3日。女の子の日。桃の節句。

「うーん、今日はいい天気になりそうだな」

私は、カーテンを開けて、空を見上げる。朝の冷たい空気のためか、
空が物凄く蒼い。

まさに、澄み切った青空。

本日は、快晴なり！

「葉月、起きてるの～？早いわね。ご飯、食べつけないなさい」
下から、母の声が聞こえる。

「分かった。すぐ、行く

「じゃ、用意してあるからね」

私は、パジャマから、セーラー服に身を包む。
最後のセーラー服。

感慨深い。

「よし、下に行きますか！」

私は、身支度をして、御飯を食べに下へ降りた。

Lesson 2 .

「おはよー。みづちゃん、愛子、真弓」

私が、教室に着くと、もつ仲良しの友達は着ていた。
いつも、遅い、ようちやんまで。本名は、容子。

「おはよ。みづ。今朝も寒いね！！」

みづちゃんが、白に息を吐いていた。

いつも、明るいようちやん。

「はあ～私は、まだ、今日が、卒業式だなんて信じられない」

のんびり屋の愛子。

大きなため息を漏らす。愛子は三年間、髪を切りずく今は腰位まで
のびた。

「だね。私、今日、泣くかな？」

いつも、微笑みが絶やさない真面目。

というか、怒ったことがない。

「うーん、私は感激屋なので泣くかもしれない」

「あー、葉月はな泣きそうね」

「そういう、ようちやんこそ」

私は、一応、ようちやんに反論する。

だつて、知つている。彼女が一番、泣き虫だとこいつことを。

「つるねー！」

と、思いつきり、ようちやんは照れる。

こんな馬鹿な騒ぎを私たちは、教室で毎日していた。

卒業式が始まるまで。いつもと、変わりなく。

そして、時間はやつてきた。

LESSON . 3

体育館にて、父兄がたくさんやつてきていた。厳肅な空気。かなり、緊張した面持ちで卒業生たちは、音楽とともに入場してきた。私も、テンションが思いつきり、高くなつたせいか、笑いがこぼれた。

「あんた、何笑つてんの？」

と、後ろにいた愛子に注意された。

「いやー。恥ずかしくて・・・」

「あー、ねー」

理解してくれた。

全員の入場が終わると、「卒業式」が始まつた。

校長先生の話が終わり、卒業証書授「の番になる。

1組から、順に各生徒の名前が読み上げられていく。中には、緊張したり、感極まつて泣き出す子もいた。

それぞれに、想いがあるのだろう。

やがて、私たちのクラスの番。

「3年7組。相田真理子」

と私のクラスの子たちの名前が読み上げられていく。

「12番、小林容子」

「はい」

ようちやんは、凛として、証書を受け取る。彼女は、県外の美大に進む。

よしひやんの志望は画家なのだ。

「18番、佐伯真弓」

「はい」

真弓は、落ち着いた雰囲気で、証書を貰う。彼女は、看護学校に進学。

彼女なら、世間でいう「白衣の天使」になるだろう。彼女の笑顔はいつも優しいから。

きっと、素敵な看護婦になる。

「23番、中田愛子」

「はい」

以外なことに、愛子は少し手が震えていた。緊張しているのかな。彼女は、県外の外語大学。超難関な四大に合格していた。

将来は、翻訳家になりたいといつ。

「28番、平井葉月」

いよいよ、私の番。

ごくりと唾を飲む。掌に冷や汗。いかん、緊張してきた。

でも、これで最後だから・・・私は、校長先生から証書を受け取る。

「おめでとう」

校長先生が、一言添えてくれた。

私は、頭を下げる。

私は、文学好きで、将来小説家になりたいがため、地元の大学に決まっていた。

そうして、卒業証書の授与が終了し、あつという間に、式は終了していった。

LESSON . 4

教室の外では、みんながあつちこつちで泣いたり、笑つたりしている。

みんな凄くいい笑顔。優しい表情。

わたしたちも、互いに、写真を撮つていた。

「やつぱり、ようちやん、泣いたね・・・」

私は、泣きはらして瞳が真つ赤になつてている彼女を覗きこんだ。

「だつて、葉月。在校生が歌う、仰げば尊しで感動しちゃつて・・・

「まだ、泣いてるよ・・・ようちやん」

愛子がハンカチを渡す。愛子もつられて涙を流した。

「はい、はい二人とも。これが、最後じゃないのよ」

真弓が一人をなだめる。以外に、最後までしつかりしていたのは、彼女だった。

「葉月も何気に目が赤いよ」

「あはは。分かる?」

「何よー、あんたも人のこといえないじゃないーー!」

ようちやんが、私に叫ぶ。

だつて、最後だよ。この制服着るの。この教室や、校舎に来るの。そう思つと、さすがに、鈍い私でも、涙くらい流すさー。

真弓が、ふつと穏やかに笑つた。

「でも、いつでも逢えるからね。私たち次第で・・・」

「確かに・・・」

私たちは、彼女の言葉に同意する。

今日が私たちの終わりでもあり、新たな始まりでもある。

これから、長い人生何が待つて いるんだろう・・・

「さあ。 最後に、四人で笑つて る写真とろうー。」

さすが、 ようちゃんが、 その場を仕切つた。

泣き笑いしながら・・・。

私たちは、 最高の笑顔で、 カメラに微笑んだ。

空は、 本当に雲ひとつなく、 真つ青だつた。

LAST LESSON

今日も、 いい天氣だな。 私は、 真つ青な空の下にいた。

散歩して いたのだ。

「あー、 早いね。 あれから、 10年か」

「そりやね、 あの ようちゃんが 結婚だからね。 愛子なんて、 アメリカに行つてるし」

横には、 白い制服を着た 真弓 がいた。

今日は、 私は、 真弓 が勤める 病院に 来ていた。

彼女は、 今では 立派な 「白衣の天使」 というか 敏腕看護士になつて いた。

「だよね。 まさか、 愛子が 連絡なかつたけれど、 翻訳家になつたは いいけれど、 一番早く結婚して ダンナアメリカ人よー子供が一人目 とか 言つてたね」

のんびり屋の 彼女が、 一番、 結婚が 早かつた。 しかも、 私らも 最近、 風の噂でそれを 知つた。

「ようちゃんも、 大変だつたよね。 美術教師しながら、 結婚するし ないで何年揉めたつけ?」

「三年。 彼女が一番、 男苦手だつたしね

「だよね」

私と 真弓 は、 顔を見合わせて 笑う。

春の暖かい空氣が 気持ちいい。 新緑の風が 私たちをの間をすり抜け ていく。

「葉月は、子供元気？本ももうすぐ、発売でしょ？よつがわんの結婚式に合わせて、発売するんだっけ？」

「やつ。よつがわんやあんたたちにプレゼント。子供もダンナも元気よ」

「あんたも、よつやく、作家か……大変だったね、編集の仕事して、職場結婚して、子供育てながら、何回も色んなコンクールにして……。デビューして、三年だっけ？」

「うん。あつという間でした」

「そう、卒業してから私たちは色々なことがあった。たくさんの、経験があつたから「今」があるのだと最近、しみじみ思う。

人はたくさんの「経験」をする。それが、大人になるための試練。「真弓は結婚しないの？」

「うーん、仕事楽しいしね、きつくてやめたくなるときもあるけれど、やっぱり、やめらないし。焦つてないしね、したいときにするわ。独身生活も楽しみたいし」

「真弓」らしい。けれど、彼女がどれだけ辛い経験を経てきたかは、少しだけ知っている。

でも、彼女の笑顔は、本当に鮮やかに微笑んでいた。

「私たちは、これからも幾多の「経験」をしていくのだわ。けれど、それは偶然でなく必然なのだと思う。そして、一人じゃない。」

「なんて、タイトルだっけ？本の題名……？」

「『立つ鳥跡を濁さず』」

「いいじゃない……みんな喜ぶわよ。高校時代の私たちでしょ？」

「モデルは」

「そう」

「真弓」が、静に微笑む。私も微笑む。

「さて、仕事に戻らなきやね。後輩が待ってるし……じゃ、結婚式でね」

「うん、またね。仕事、頑張って
「お互いに」

「真弓」は、最高の笑顔で病院に戻つていいく。

私も、彼女の後ろ姿を見送りながら、また、自分の日常にもどる。

私たちは、もう、あの頃には戻れないけれど。
新しい思い出を。一日を、生きていく。

「大好きな親友へ・・・」の本を捧げます・平井葉月・・・
『立つ鳥跡を濁さず』

(ねえー将来、どうしてるかな・・・わたしら)

(さあ、ちゃんと生きてるわよ)

(だね)

(そうよ)

優しく、穏やか時間は、いつまでも。

本と私の記憶の中にある。どんなときも。

「立つ鳥跡を濁さず 平井葉月」

END

(後書き)

「J意見、J感想お聞かせください。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1383a/>

立つ鳥跡を濁さず

2011年1月26日13時06分発行